

## 『尾藤正樹展 2018』のご挨拶と金属エンジニアから画家への変身の経緯

- 銀座ギャラリー枝香庵は開廊以来11年になります。私は、本画廊では今回で8回目の個展となります。この度も、ギャラリー枝香庵のご好意で半ば企画展のように取り扱っていただき感謝に堪えません。

そして、そのご支援に応えられるために、懸命に作品づくりに励みました。

幸い多くの知人、友人はじめ絵の仲間の皆様に支えられながら、この20年間で、新作発表は300点を超えました。

- とくに、ニッチギャラリー主宰の西村富彌先生(★1)には、日頃からご支援賜り何かとご気に掛けていただき、また多くの刺激を受けながら、今日に至っていますこと重ねて感謝申し上げます。

((★1) 西村富彌：芸大卒上野の森美術館アートスクール先生、銀座ニッチギャラリーオーナー)

- 翻っては、30年前に当時、多摩美術大学教授小作青史先生(★2)との出会いが無ければ私の絵画歴はありません。それは、私が金属加工の技術者(★3)の折に電解銅箔をキャンバスとしての可能性のアイデアを小作青史先生が提案されたことに始まったのです。

(電解銅箔は厚み40ミクロン(0.04mm)で当時コンピューターのプリント基盤に使用することで量産されていました。)数々の試行錯誤と当時の日鉱金属(株)(現JXTGホールディング(株))の支援も受け基研究の後、特許取得し、商品名銅箔キャンバス(CopperCanvas)として平成2年に世に商品として出すことができました。それから28年が経過中です。

(今は、40ミクロン厚の銅箔の製造が無くなり、現在10~20ミクロン厚の極薄の箔に変更になったので、残念ながら、キャンバスに適した厚みの銅箔製品はなくなり、販売は中止となっています。)

((★2) 芸大卒元多摩美術大教授、現日本美術家連盟委員、自由美術会員)

((★3) 銅および銅合金の圧延工場勤務：元日本鉱業(株)倉見工場)

- カッパーキャンバス(電解銅箔キャンバス)の特徴：通常絵を描く基底材としては、麻布・綿布・絹など所謂布製キャンバスがメインです。水彩やアクリル画は布、または紙を使用します。銅に描くことは昔は宗教画にはありましたが、今は皆無です。この電解銅箔の特徴は、布の場合に比較して縦目横目が無いこと表面に微細な(マイクロ単位)凹凸があることです。これによって、顔料の食いつきが良く、光が当たった時、描画された色彩がすべて反射されることで、鮮明且つ細密に仕上がります。虫食い、カビ汚染もなく絵画作品としては長持ちします。

- このカッパーキャンバス(電解銅箔キャンバス)の特徴を生かすために自ら絵を描き始めたのがきっかけで平成10年に画道に入り、今年で20年になります。今は、サロンブラン美術協会に所属し、年間通じてニッチギャラリー、銀座ギャラリー枝香庵などのグループ展で絵画作品数点を発表し、また年に1回は国立新美術館において、日仏現代国際美術展でも発表しています。過去20年の間には、海外(パリ、NY、NZ、上海)でもグループ展に関与。今回は、銀座ギャラリー枝香庵での個展ですので、手持ちのカッパーキャンバスを使用し、11点作画し、他の基底材の作品とも合わせて27点出品しました。

- 今後も、絵画は、私にとっても、見る方にとっても癒しになると思っています。いつまでも続けていきたいと思っています。

郷里高松では絵画教室も開催しています。

楽しくご鑑賞いただければ嬉しく存じます。皆様方の益々のご指導ご支援を賜りたくお願い申し上げます。